

H25地域協働研究（地域提案型・前期）

RF-06「盛岡の生活・空間資源（特に盛岡城跡周辺）の文化地層的な解説と活用法、及びその実践活動を通じたまちづくりと参加・協働の意識・体制づくり」

課題提案者：文化地層研究会、研究代表者：総合政策学部 教授 倉原宗孝

研究メンバー：金野万里、真山重博（文化地層研究会）、雫石吉隆（東北博報堂盛岡支社）、三浦陽一（盛岡市都市整備部）、吉田春彦、北田雅浩（同、商工観光部）

<要 旨>

本研究では、盛岡市（特に盛岡城跡周辺）に潜在・顕在する各資源をこれからのまちづくりに向けて整理・評価すること、また各主体・関係者が参加・協働するまちづくりへの意識・体制づくりを目的とする。各資源については、盛岡城跡及びその周辺環境が持つ諸要素について、また郊外・周辺地区について取り扱った。同時に市内に発生した建造物保存や都市整備に関わる具体的課題についても関わった。これらを通じて各資源の活用方策と今後のまちづくりの方向や課題を提示する。また参加・協働するまちづくりに向けた実践活動として、有効なテーマ・対象として研究期間中に形成された市内商店街のあり方を考えるワークショップ等の作業を試みた。

1 研究の概要（背景・目的等）

盛岡城跡及びその周辺環境は、学術的な資源をはじめ貴重な素材が豊富に存在している。この地区は盛岡市のまちづくりにおいても重要エリアで、中心市街地の活性化、観光振興などにも力を入れている。しかし地区に内在する多面的資源の収集・評価は十分とは言えず、今後のまちづくりを睨んだ評価・活用方策を導き出すことが本研究の目的となる。

同時に今後の市民主体あるいは協働のまちづくりを進めていくためには、市民が自ら住環境に対する認識・愛着を高め、その整備や活用に関わっていく必要がある。その上で先の各資源を題材にしながら市民のまちづくりに向けた意識と行動を醸成していくことも狙う。

さらに今後の都市形成においては、行政のみではなく各主体が参加・協働し合う体制づくりが重要となってくる。その上で本研究を通じて、まちづくりに向けて各主体が協働する活動の経験を仕掛け、今後の各種展開への基盤形成を生む。

2 研究の内容（方法・経過等）

(1)各種資源の整理・拡充と評価、活用方策検討

研究の主メンバーである文化地層研究会はこれまでも盛岡市内外の各種資源の豊富な収集・整理を行ってきた。そこでまず、これら資源情報の整理と共に今回新たな情報も加えながら、それらに対する評価を随時行っていた。本研究メンバーに加え、文化地層研究会には多様な職業のメンバーがいるが、これら各種視点から定例・非定例の集まり（毎月1回ほど）の中で評価作業を重ねていった。こうした評価に当たっては、県外識者の評価も参考にしていた。

(2)保存・整備計画など具体のまちづくりへの関与

上記作業と平行しながら、市内で起こった各まちづくりの動き（特に建物保存や都市整備）に積極的に関与した。主なテーマは歴史建造物保存（大清水多賀本店）、都市整備（桜山界限、岩手匠大跡地、川とまちづくり）、文化・産業（外山御料牧場）などである。こうした具体のまちづくりへの参加・参画を通じて、各資源の評価を深め、また活用方策を探ると共に、今後のまちづくりに向けた市民の意識・認識の向上および行政をはじめ各主体が協働する関係・体

制づくりへの動きとした。

(3)協働の体制作りに向けたワークショップ等の実践

各主体が協働する体制作りに向けて、当初(1)を題材にした市民学習などを想定していたが、有効な研究素材として(2)の具体的活動に各種テーマで多数関わることになった。いずれも重要・有効なテーマであるが、研究期間内に各主体が協働する体制構築に向かうのは難しい。そこで協働体制に向けた活動の実践に関しては、本研究メンバーである盛岡市（商工観光部）でも関与する市内各商店街を題材にして、商店主・市民・行政を交えたワークショップ等を一連のプログラム（4回）のもとに行った。商店街は市のまちづくりを睨む上でも重要テーマであり、今回形成された活動・体制をさらに拡充しながら次年度以降も継続することになっている。

3 これまで得られた研究の成果

(1)各資源の文化地層的な解説と活用方策の検討

主研究メンバーである文化地層研究会では、これまでも市内外の各種資源・要素を収集・活用してきた（建造物、食、生活、文化、史実、等）。その内容については紙幅の都合でここでは割愛するが、これらの評価や活用方策を検討する上で「文化地層的な視点」から見つめることの必要性・有効性について指摘しておきたい。すなわち「文化は単層ではなく、幾重にも地域に記憶として積み重なる、歴史の地層のようなものである」という研究会が掲げるアプローチ法である。市内には無形・有形の各分野にわたる様々な資源があるが、それぞれが一定の時代に生まれたものである。こうした時代の経験の積み重ねのもとに現在の私たちが暮らす街があり、そのことへの認識と発見が、現在の各種都市問題（開発と保全、



各資源の評価など、飲食も交えながら毎回楽しい話し合いを重ねた。これまでも同様な活動を展開してきたが、行政など様々な立場からの情報・意見も交えながら具体のまちづくりに向けてより実践的展開に向かう議論になった。

福祉・教育、市民参加、等)を軽やかに乗り越える方向と方法を照らし出すことが多い。逆に、こうした重層的な視野を損なうと、閉鎖・偏重した価値観から今後のまちづくりに向けて関係者間の議論がかみ合わないことが多い。

今回の研究期間では特に保存整備計画が進んでいる盛岡城跡公園、開発等の問題で地元住民と行政で議論になった桜山参道界限などの情報・評価を深めていった。ここにも、藩政時代、近代、戦後など幾重もの時代の経験がある。その捉え方や価値観は各自で様々であるが、そうした多重の時代性を踏まえた認識に立った議論のなかで、今後の盛岡らしいまちづくりが展開し得るものといえる。



現在も議論・計画が展開中の盛岡城跡公園及びそこからみる桜山商店街(先日、火事が発生し話題になった辺り)。地元学やシンポジウム等を通じて、地元住民、行政、関係者を柔らかに結ぶ場を設定できないか等の議論もされた。

(2) 今後さらに求められる情報と協働体制

本研究期間中にも具体的都市整備などに関する課題が生まれた。本研究においても有効・重要な内容であり、積極的に関わりながら、課題解決の活動と共にその評価を行った。

例えば、歴史的建造物であり市民の思い出も多い「大清水多賀本店」の解体とその保存運動は示唆的な一つである。結果、保存は叶わなかったがその中で、市民には十分伝えられていない都市整備の情報、行政と市民の連携が未だ不十分なこと、当該地区(をはじめ市内の歴史的な重要地区)の景観・自然などに配慮した計画指針が整っていないこと等、今後のまちづくりに向けて重要な課題があぶり出された。

あるいは、先の桜山界限においては、行政的アプローチとは別に、界限に関わる人達への思い出話などの聞き取りから今後の整備方策を探る等を行った。聞き取りでは、例えば神社の潔斎所を住民のお風呂代わりに貸していたなど、土地の賃借関係ではなく、生活経験を通じた関係があり、そこから整備に向けた議論・計画が有効なこと、戦後復興期の様子にも魅力的な景観・空間があったことやその現代的評価などが行われた。

また市内関係者のみではなく、県外の各まちづくりに関わる方々へも、イベントなどの開催を通じて随時、ヒヤリング・情報収集などを行っていった。例えば、盛岡市において河川は一つの重要な要素だが、そうした川とまちづくりのあり方、それへの市民の意識・行動、行政と市民の連携など、柳川市、松江市などの経験から示唆が大きかった。

そのほか、「だんご」など食文化の意味や価値、生活や言葉、あるいは郊外では伝統芸能や外山御料牧場など、情報収集と評価を深めた多くのテーマがあり、今後の状況を見ながら具体的な活動を仕掛けていく予定である。

(3) 盛岡市の店・商店街の意味とこれからを考えるWS

各主体が協働する体制づくりに向けた学習会・ワークショップとして、先に触れた今年度の状況から、今回は

盛岡市の今後のまちづくりににおいても重要となる商店街をテーマに関係者と共に一連の取り組みを行った。市内各商店街関係者を中心に市民・行政など約20名の参加で毎回活発な議論が行われた。各回のテーマ・内容は下記。

□第一回(H.25.8.19)「商店街とはなにか、活性化とは」

「人」「交流の場」といったキーワードが出てきた。単なるイベントではなく日常的な「集いの場」の機能性の指摘。

□第二回(H.25.10.9)「商店街の問題と解決方法」

後継者不足、売上減少など全国同様の課題が確認。盛岡の伝統・文化を活かしつつ「新しい」を如何に見いだすか。

□第三回(H.25.11.27)「盛岡の商店街の歴史を振り返る」

盛岡の商店街の歴史を振り返る。今後を考える上でもその歴史・経験を見つめることの重要性・有効性が再確認される。

□第四回(H.26.3.13)「若者からみた商店街と今後への評価」

学生から現在の商店街に対する時に厳しい指摘などの意見・アイデアが出され検討。今後も続けようの意志生成。



いずれの回も参加者にとってこれまでになかった新鮮な経験だったようで非常に活発な議論がなされた。話し合い・WSのあとは毎回懇親会を行い、議論を振り返ると共に今後の持続的取組への意志が醸成された。

商店街また中心市街地の後は全国的な課題であり、同様の問題が提示・共有された。同時に、その歴史等の経験から、近江商人の思想、かつての商店街や店・顧客との関係など、盛岡市独自の今後の指標(例えば、現在の経済性・効率性優位の商業や都市整備のあり方から、新たな価値・仕組みを独自に創造していくなど)もみられた。特に第三回では本研究にも直接関わるテーマ・内容で議論され、こうした議論が今後の研究展開の柱の一つともなりそうである。今回は商店街関係者が主な参加者となったが、これまで市内にある各商店街を横断的に結ぶ議論の機会はなかったようで、今後に向けた体制作りの一つになった。今後、市民他各主体の輪を広げながらさらに具体的議論・実践に向かうことが期待される。

4 今後の具体的な展開

今回、整理・発掘した各資源情報を具体的にまちづくり活動や計画に活かしていきたい。この点ではこれまでも観光、商業、都市整備など各分野に寄与してきたが、さらに盛岡独自の市民運動としての実践に向かいたい。また今回の研究から市民の主体性、行政各主体との協働関係の構築がさらに求められることが確認された。これらの点に焦点を当て今回関わった活動ははじめ広く盛岡のまちづくりを先導していきたい。

5 その他(参考文献・謝辞等)

盛岡市内外の一般市民の方々、各分野・専門家の方々から様々な情報提供・アドバイスを頂いた。記して感謝する。